

第1回 オルタナティブな協同組合としてのアソシエーションへ

1. オルタナティブについての私的回想

- ①1970年代：「成長の限界」「転換期」「パラダイムチェンジ」等が言われ出した。
～背景には、1960年代からはっきりし出した欧米における資本主義の停滞があった。
- ②1980年のICA（国際協同組合同盟）モスクワ大会において、カナダのレイドロウ博士は『西暦2000年における協同組合』を発表し、そこでこれまでの消費生協に代えて「生産協同組合」をベースにした「協同組合地域社会」の建設を提起した。その背景には、①に連動した欧米の協同組合における事業の停滞があった。
- ③1980年代：米英で新自由主義政策が展開され出す一方、日本はバブル期で生協も急拡大するが、協同組合運動では生活クラブ生協を中心に「オルタナティブ」が語られ出した。
- ④蛇足を言えば、私は1970年代半ばから生協で働き出し、併せて日本社会党で活動を始めたわけだが、70年代後半の社会党では自主管理が語られ出し、ソ連社会主義の見直しとソ連派と中国派の派閥抗争が激化し、1980年代に入ると社会主義理論センターにおいて、「新宣言」づくりが始まり、そこでは「協同・連帯部門」や「中間組織」が語られていた。
- ⑤当時は未だ小生協郡であった現パルシステムでは、とりあえず田中学氏と高木郁朗氏を座長に招いてコープ研究会を立ち上げ、大内力、大内秀明、新田俊三の各氏を招いて研究会を行い、「転換期における協同組合」をまとめた。
- ⑥当時の参考文献は以下のとおり、どれも新しい社会の模索と構想であった。
 - 大内力『現代社会主義の可能性』（東京大学出版会 1975）
 - レイドロウ報告『西暦二〇〇〇年における協同組合』（日本生協連 1980）
 - 社会運動研究センター『協同組合運動の新しい波』（三一書房 1983.1）
 - 大内力『国家独占資本主義・破綻の構造』（御茶の水書房 1983.6）
 - 社会主義理論センター『新しい社会の創造』（1983.10）
 - 新田俊三『高度社会システムの創造』（第一書林 1985）
 - 大内秀明『ソフトノミックス』（日本評論社 1990※「経済評論」1988年1月～）
 - 横田克己『オルタナティブ市民社会宣言』（現代の理論社 1989）
- ⑦訳あって2000年4月に生協を辞めた私は、せつかく被雇用労働を止めたのだから、今後は脱労働力商品化＝オルタナティブに生きようと、個人事業の「SOHOダルマ舎」を立ち上げ、ほかに仕事起こしのNPO「自主事業サポートセンター」を立ち上げて、そこを協同組合にみたくしようとしたのだが、NPOは失敗して清算した。※『時代へのカウンターと陽気な夢』参照。
- ⑧作並に「モリスの館」が出来て以降は、毎年そこに通って大内先生から宇野経済学を学び、やがて「労働力商品の止揚によるコミュニティの形成＝協同組合地域社会の形成」というシエーマを得て、以後その実現をめざして、「ダルマ舎叢書」を企画、社会評論社の協力を得て、2019年以降「ダルマ舎叢書」全5冊ほかを出版し出した。※は社会評論社刊
 1. 2014年11月：大内秀明氏と共著で『土着社会主義の水脈を求めて』※
 2. 2019年5月：『時代へのカウンターと陽気な夢』※同年6月に明治大学で、大内秀明&鎌倉孝夫の両氏による版記念シンポジウム「労働力商品の止揚と労働運動」を開催。※別画像1
 3. 2019年9月：半田正樹・篠原弘典『原発のない女川を』※同年12月28日に出版記念会
 4. 2020年6月：『西暦二〇三〇年における協同組合』※同年10月18日出版記念シンポジウム

※『西暦二〇三〇年における協同組合』は、別紙のとおりの評を得た。※画像2

5. 2020年7月：大内秀明『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論』
6. 2021年6月：瀬戸大作『新型コロナ災害緊急アクション活動日誌』※
7. 2021年内に平山昇『文学と共同体』を刊行予定

2. アソシエーションの形成をめざすオルタナティブな協同組合型任意団体へ

- ①当初の計画では「ダルマ舎叢書」全5冊の出版後はあと何冊か作って、隠居して小説を書く予定であったのだが、提携する社会評論社が出版不況とコロナ禍による売上減少により、昨年より高齢の社長（無給&休日出勤）+社員1名による自転車操業が常態化して、予定の出版企画をこなせなくなっていて、大内先生の「晩期3部作」の出版などが滞っている。
- ②そこでこの間、『新型コロナ災害緊急アクション活動日誌』を共同編集した土田、平山ほかで生産協同組合をつくり、社会評論社のサポートを兼ねてダルマ舎系の出版企画をすすめることとした。要は、「SOHOダルマ舎」を生産協同組合化するわけである。
- ③生産協同組合には、労働者協同組合連合会のワーカーズ・コープと、生活クラブ系のワーカーズ・コレクティブがあるわけだが、7月17日に5名の発起人と相談した結果、年寄り中心のささやかな事業だから、ここは法人化というよりは、ゆるやかな「協同組合型の任意団体」としての「アソシエーション・ダルマ舎」でいくこととした。
- ④韓国では5人集れば協同組合がつかれるという「協同組合基本法」があるわけだが、それを日本で先取りするかたちで、少人数による「協同組合型の任意団体」を立ち上げるわけである。
- ⑤ミッションは「アソシエーションの形成と実践」、事業的には「本づくりを通じてのアソシエーションの形成」となるわけだが、他のアソシエーションとの連携のハブにもなり、当面は「仙台・羅須地人協会」と「松本グループ（小出裕章、鶴飼哲）」との連携をすすめる。
- ⑥「アソシエーション（A）・ダルマ舎」は、出版のほか、アソシエーションの形成に関連する研究会を企画し、宇野経済学と柄谷行人のアソシエーション論についてそれを行う。
- ⑦「A・ダルマ舎」がボランティアで社会評論社をサポートする代わりに、「A・ダルマ舎」は社会評論社から仕事スペースを無償提供され、主に土曜日を中心に作業や研究会をそこで行う。
- ⑧今後の出版予定
 1. 大内秀明「晩期3部作」Ⅱ・Ⅲ
 2. 半田正樹「(斉藤幸平論)」※相談中
 3. 福留久大「人新世時代の社会主義」（「進歩と改革」に連載中で以下の構成）※未定
 1. 人新世を生き抜く模索
 2. 斉藤幸平のコモン再生
 3. 大内秀明のモリス推奨
 4. 「所有法則の転変」論
 5. 資本主義の核心的矛盾
 6. 社会主義構想の二潮流～福留氏は、ここで鎌倉孝夫氏の「『資本論』の「社会主義」論」を取り上げ、「宇野弘蔵に始まり、大内秀明や鎌倉孝夫によって継承された〈労働力商品化〉の概念は、如何なる形で問題とされるのか」と提起している。※共通認識のたたき台として軽装版を検討中。

※第2回は「アソシエーションの形成によるオルタナティブな地域社会づくりへ」を予定。